

平成30年度入学試験問題

小論文(帰国子女入試)
(国際地域学科地域教育専攻)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題紙を開かないこと。
- 2 「問題」は1～3ページです。
- 3 解答用紙は2枚、下書き用紙は2枚あります。
- 4 解答は指定された解答用紙に記入すること。
- 5 受験番号は解答用紙の指定欄に記入すること。
- 6 解答は横書きとし、指定された字数にまとめること。
- 7 解答用紙のみを提出し、問題紙・下書き用紙は試験終了後、持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外(下書き用紙など)は受理しません。
- 8 試験中に問題紙の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題 次の文章は通常学級と特別支援学級（特殊学級）の交流及び共同学習*に長く取り組んできた安部先生の実践報告である。文章を読んで、後の設問1，設問2に答えなさい。

今でも忘れられない、ふたつの出来事がある。15年前、陽だまり学級の担任をしていた時のことである。

ヨシミちゃん（仮名）は、明るくて元気いっぱい6年生の女の子である。軽度の知的な遅れと視覚障害があった。ピアノを弾きながらディズニーの歌を歌うのが好きだった。リズム感も音程もなかなかのものであった。そこで、音楽の専科**と相談して、週2時間ある通常学級の音楽の授業に参加させることにした。

通常学級の子どもたちとも長い付き合いである。朝の会や帰りの会はもちろん、給食や掃除、遠足などにも一緒に参加してきた。音楽の時間はヨシミちゃんにとって、とても楽しみな時間となった。

区内の合奏コンクールのための練習が本格的になった秋のことである。通常学級の子が2人して私のところに来て、もじもじとしながらこう言った。

「あんべ先生、あのね。ヨシミちゃんの音がいつも外れてしまうの。私たち、小学生最後の思い出だから一生懸命練習してきたの。優勝したいと思っているの。でもね、……」

私に何とかしてほしいと訴えにきたのであった。翌日には、音楽の専科からも相談を受けた。

「交流の大切さは私にもよくわかります。でも、コンクールに向けて一生懸命練習してきた通常学級の子もたちの気持ちも大切にしたいと思うのです。音楽の教師として、合奏曲を完璧にしたい気持ちもあります。ヨシミちゃんの参加の仕方について、もう少し考えていただけませんか？」

ジレンマに陥った。ピアノの得意なヨシミちゃんにとって、エレクトーン以外に彼女の能力を生かせる楽器はない。笛とか木琴・鉄琴は難しい。ヨシミちゃん自身、エレクトーンの演奏に燃えていた。はてはて、どうしたものか……頭を抱えてしまった。

ユタカ君は自閉症である。小学校1年生までは、自分の思い通りにならないことがあると大声で泣き叫ぶことがあった。コミュニケーションの学習が功を奏して、2年生になるとだいぶ落ち着いてきた。かけっこは速かった。自転車にも乗れるようになった。水泳も得意だ。一人で行う運動は得意だが、ルールのある集団ゲームに参加するのは、とても難しい子であった。

3年生になって、通常学級の担任が小林先生（仮名）になった。私と彼とは妙にウマが合った。教師も人間、相性の良し悪しは当然ある。それが教育活動に影響してはならないと思うが、互いに腹を割って話せる人間関係が築かれていたほうが仕事がうまくいくのは事実である。ユタカ君を体育の授業に参加させてほしいと、ある日のこと小林先生に話をもちかけた。

児童数の少ない特殊学級では、ダイナミックな集団ゲームがなかなか設定できない。机の上でのコミュニケーション学習はできるようになっても、実際の学校生活の中で応用するチャンスがない。通常学級の中で、友だちとの関わり方を学ばせたい。こうした思いを、ストレートにぶつけてみた。小林先生は、「よしっ、わかった！」と、快諾してくれた。「来月から体育でボールを使ったゲームをやるから、その時から一緒にどう？」と、誘ってくれた。

私はユタカ君が理解できるように、ポートボールのルールを絵カードで示した。実際に使うボールと踏

み台を使って特訓した。

こうして、いよいよ通常学級の体育の授業に参加する日となった。はじめは、子どもたちもゲームの要領がつかめなかった。ユタカ君に対しても、どこか遠慮しているようにも見えた。ところが、回数を重ねるにつれて通常学級の子どもたちはグングンと腕を上げた。

ある日のこと、ついに子どもたちから不満の声が上がった。

「ユタカ君がチームにいと勝てない！ とろいんだもの……」と、ある子が言い出したのである。確かに、私が特訓したとはいえ、ユタカ君の動きは一步も二歩も遅れている。パスをもらっても、よそ見をしているから上手くキャッチできない。通常学級の子どもたちのスピードの中では、あれだけ練習したシュートをずる機会すらない。

（無理もないか……）と、思った瞬間、小林先生の怒鳴り声が体育館中に響き渡った。

「とろいとは何事だ！ ユタカ君は、一生懸命にやっているんだぞ！ 友だちを馬鹿にするような言い方は、先生は絶対に許さん！」

子どもたちは、一瞬シーンとなった。でも、納得しているわけではない。小林先生は言った。

「この後の時間を君たちにあげよう。ユタカ君も参加できて、かつ君たちも楽しめるようなポートボールのルールをみんなで話し合って考えなさい」

口調は穏やかであったが、いい加減な話し合いをしたら承知しないぞ、という気迫がこもっていた。

さて、わたしの遭遇したふたつの出来事は、交流及び共同学習を進めていけば容易に起こり得ることである。

特別支援学級の子どもにとっても、また、通常学級の子どもにとっても、お互いに意味のある交流及び共同学習とは……なかなかの難題である。

特別支援学級の子どもの状態、通常学級の子どもたちの育ち、日常の交流の密度、教師の考え方、保護者の願いなど、ケースによって違う。一概にこうすべきだとは言えない。

先の話に戻そう。ヨシミちゃんは結局どうなったか。担任と保護者、音楽専科との話し合いで、曲の完成度にあまり影響のない鈴に代えることになった。一方で、ヨシミちゃんの優れた能力と努力とを認めてあげる別の場面を設けようということになった。コンクールの翌週に行われた全校音楽朝会で、大好きなディズニーのピアノ曲を全校の前で披露した。大きな拍手をもらって、ヨシミちゃんもお母さんもうれしそうだった。

一方、小林先生の一喝で真剣に話し合いをした子どもたちは、次のようなルールを作った。

ユタカ君が参加するポートボールの試合では、

- ① 2m以上離れた所からユタカ君にパスして、キャッチできたら1点与える。
- ② ユタカ君がシュートを決めたら3点与える。
- ③ パスする時、ユタカ君がボールの方向を見るように「ユタカ君、いくよ！」と、声をかけてからボールを投げる。
- ④ 声をかけてからユタカ君へのパスは、途中で横取りしない。

友だちの呼びかけに振り向かないと、飛んできたボールが顔にぶつかってしまう。次第にパスしてくれる友だちと視線が合うようになった。ユタカ君がボールをキャッチすると、歓声とともにハイタッチの嵐が湧き起る。子どもたちは、さらに話し合っ、パスする距離を2mから3mへ、やがて4mへと長くしていた。

ふたつの事例とも、はたしてこれで本当に良かったのかどうか、今もってわからない。とくにヨシミちゃんの場合には少し残念な気持ちもある。

当時、特殊学級の子どもの笛の穴にテープを貼って、音が出ないようにしてコンクールに出場させていた学校があった。考え方は、いろいろあるだろう。

大切なのは、子どもたちにとって意味のある「折り合い所」をみつけようと努力をすることと、最低限の人権感覚ではあるまいか。

(安部博志『がんばれ先生シリーズ(6) 発達障害の子どもの指導で悩む先生へのメッセージ^ゆ結^まい廻る：つながっていきましょう！』明治図書刊(2010年)より抜粋。一部改変)

(注)

*交流及び共同学習～ここでは特別支援学級と通常学級の児童と一緒に学習や活動をすることを指す。

**音楽の専科～音楽だけを専門に教える教員のこと。

設問1 ヨシミちゃんとユタカ君の事例は交流及び共同学習を進めていく中で生じた困難な状況について触れている。困難な状況の発生要因について200字以上250字以内で書きなさい。

(40点)

設問2 下線部「特殊学級の子どもの笛の穴にテープを貼って、音が出ないようにしてコンクールに出場させていた学校があった」事例は、「お互いに意味のある交流及び共同学習」という視点から考えると、どのような課題があるか600字以上700字以内で論じなさい。(60点)